

## 生活技術に関わる家庭科教育の効果と学習機会について

工藤 寧子\*・葛西 美樹\*

The effects and learning opportunity of home economics education about life skills

Yasuko KUDO, Miki KASAI

Key words : 家庭科教育 home economics education  
家庭教育 home education  
学習機会 learning opportunities  
質問紙調査 questionnaire survey

### 1. 序論

人々の生活が多様化する現代社会において、家庭科教育は家族・家庭、衣・食・住、消費生活・環境、情報、産業等と幅広い分野の基礎的知識と技能の習得を通して、より良い生活の実現を目指している。また、実際の生活場面で起こりうる様々な課題を発見・設定し、その解決を図るための実践的・体験的な学習内容を重視している。

「生活技術の定着と家庭科教育の課題（葛西・工藤，2020）」<sup>1)</sup>で、衣・食・住領域に着目し、その知識・技能が家庭生活で実際に活用されているのか、また、居住地域の違いが活用度に影響があるのかを知るため調査した。その結果、住生活領域の技と知識の定着度が不足していること、高等学校の学習内容の活用度が低いこと、小学校の学習内容は全般に活用度が高いこと、住生活領域の防災・防音で地域差がみられたことなどを報告した。

本研究では、先に調査した衣・食・住領域24項目の内容が、小・中・高等学校の家庭科教育で学び得たのか、家族など家庭内教育により学んだ知識・技能であるのか調査し、家庭科教育の効果と学習機会との関連をみる。

また、既存データと比較し、地域の違いについて考察する。

### 2. 既存データ

分析には、「日本学術会議健康・生活科学委員会家政学分科会、家庭科及び家庭科教員養成に関する調査—これからのくらしに家政学が果たすべき役割を考えるために—、2014.8」<sup>2)</sup>を用いた。このデータは、2013年9～10月に実施したもので、684名の大学生を対象に、衣食住の基本的スキルの学習効果について調査したものである。

調査内容は家庭科で学習する内容の中から、衣生活・食生活・住生活に限定し、各領域から8項目が設定されている。

『衣生活関連の技と知識』

『食生活関連の技と知識』

『住生活関連の技と知識』

の各領域8項目、計24項目

### 3. T大学調査

家庭科で学ぶ衣・食・住領域(24項目)の技術と知識について「知っている」と答えた学生を対象に、どこで学んだのかを質問紙を用いて調査した。

調査時期：2018年1月

\* 東北女子大学

調査方法：質問紙を用いて、約 10 分間で回答

調査内容：既存データと同一の内容 24 項目とした。ただし、学校での学習機会をより明確にするため小学校・中学校・高等学校と校種を分けて実施

調査対象：青森県 T 大学小学校教職課程履修者 37 名

調査結果

『衣生活関連の技と知識の学習機会』

8 項目すべての内容で、60%以上の学生が小・中・高等学校で学んだと回答した。小学校で学んだと回答した割合が高かった項目は、「ボタンの補修」「針と糸のほころび直し」「ミシンで縫う」「靴下の洗濯」、中学校では、「衣服サイズ表示の理解」「表示の意味がわかる」「表示をみて洗剤を選ぶ」の 7 項目であった。高等学校では「織物と編物の違い」を学んだと回答した割合が高かった。

家族から学んだ割合が 50%以上の項目はなかった。

『食生活関連の技と知識の学習機会』

小・中・高等学校で学んだ割合が 60%以上の項目は、「栄養素の名前と働き」「栄養を考えた食事のとり方」「ご飯の炊き方」の 3 項目であった。小学校では、「ご飯の炊き方」を学んだと回答した割合が高く、「栄養素の名前と働き」「栄養を考えた食事のとり方」の項目はほぼ同数の学生が小・中学校で学んだと回答した。

「生鮮食品の選び方」「茶碗蒸しの作り方」「食器の洗い方片づけ方」の 3 項目は、50%以上の学生が家族から学んだと回答した。

『住生活関連の技と知識の学習機会』

60%以上の学生が小・中・高等学校で学んだと回答した項目は、「防音を考えた工夫」「整理整頓の仕方」「間取り図の書き方」の 3 項目であった。小学校では、「整理整頓の仕方」を学んだと回答した割合が高く、中学校では、

「防音を考えた工夫」「間取り図の書き方」を学んだ割合が高かった。

家族から学んだ割合が 50%以上の項目は、「近隣の接し方」のみであった。また、家庭科教育や家族以外のその他で学んだ割合が 40%以上の項目は、「地震に備えた家具の配置」で、家庭科教育や家庭内学習から学ぶ割合よりも高かった。

#### 4. 既存データと T 大学調査との比較

〔共通事項〕

『衣生活関連の技と知識の学習機会』

すべての項目（8 項目）で 60%以上が小・中・高等学校で学んでいた。家族から学んだ割合が 50%以上の項目はどちらのデータともなく、共通性がみられた。また、「家族から学んだ」割合が 20%以下の項目は、「衣服サイズ表示の理解」「織物と編物の違い」「表示の意味」「ミシンで縫う」「針と糸のほころび直し」「ボタンの補修」の 6 項目で、衣生活領域は家庭内での学びが低いことが考えられた。家庭科教育で取り扱う必要性が高いことが推察される。

『食生活関連の技と知識の学習機会』

小・中・高等学校で学んだ割合が 60%以上の項目は「栄養素の名前と働き」「栄養を考えた食事のとり方」「ご飯の炊き方」の 3 項目であった。特に「栄養素の名前と働き」の項目はどちらのデータとも家族から学んだ割合が既存データ 3.6%、T 大学 5.6%と低い値で、栄養に関する知識は家庭科教育で担っていると推察される。

一方、「食器の洗い方片づけ方」は両データとも家族から学んだ割合が 50%以上だったことから、家庭内学習及び家庭科教育の双方で学んでいた。

生活技術に関わる家庭科教育の効果と学習機会について

『住生活関連の技と知識の学習機会』

「間取り図の書き方」のみ 80%以上の学生が小・中・高等学校で学び、家族から学んだ割合が10%以下であった。唯一、調査対象の全大学生が共通して家庭科教育で学んだと認識していた。それ以外の項目は学校で学習した自覚がない学生が多いことが推察された。

家族から学んだ割合が50%以上の項目は、

「近隣の接し方」「掃除の仕方」の2項目であった。特に「近隣の接し方」の項目は、家族から学んだ割合が既存データ 59.7%、T大学 44.7%と住生活の中で最も家庭内教育がなされていた。

学校教育で取り扱いが難しい日常生活の人の関わり方は、家族とのこれまでの生活の中から自然と学んでいると考えられる。

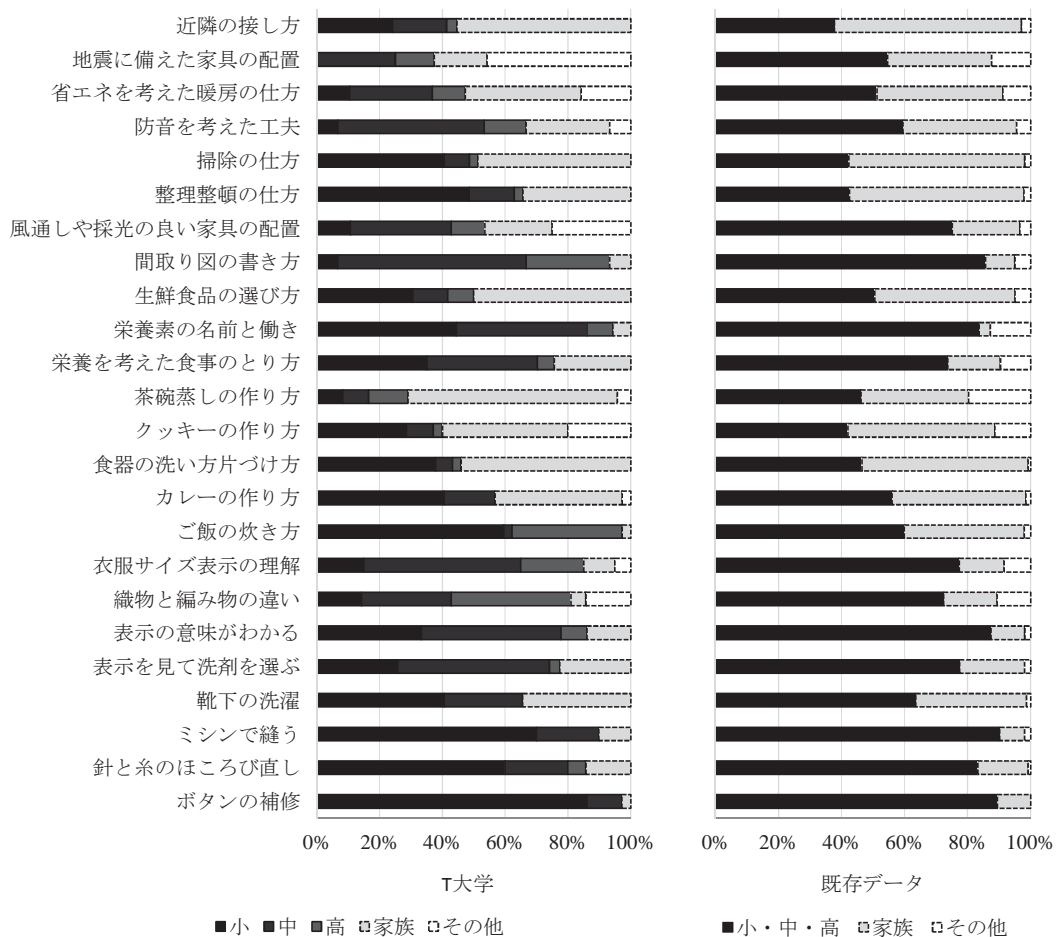


図1 衣・食・住領域の技と知識の学習機会

【相違事項】

『衣生活関連の技と知識の学習機会』

学習機会に、相違する傾向は見られなかった。

『食生活関連の技と知識の学習機会』

既存データと比較して、「ご飯の炊き方」「茶碗蒸しの作り方」に相違がみられた。

「ご飯の炊き方」の項目では、小・中・高等学校で学んだ割合が、既存データが60%に対して、T大学では97.3%と高い。T大学が高い理由は、小学校教職課程履修者を対象に調査をしたため、小学校の教科書に記載されている鍋で炊く学校の炊飯と捉え、日常生活の炊飯方法と結びつかなかった可能性がある。

「茶碗蒸しの作り方」では、既存データが34.2%、T大学は66.7%が家族から学んだと回答し、地域の特性がみられた。T大学の地域では、茶碗蒸しは正月やハレの日など人が集まる席でふるまわれる。日常食という概念よりも特別な時に食べるものとの考えがある。そのため、24項目の中で家族から学んだ割合が最も高い項目であった。このことから生活文化の継承がなされていると推察される。

『住生活関連の技と知識の学習機会』

「地震に備えた家具の配置」「風通しや採光の良い家具の配置」の項目に地域差がみられた。

「風通しや採光の良い家具の配置」では、小・中・高等学校で学んだ割合が、既存データが75.1%に対して、T大学では53.5%と低い。また、学校・家庭以外のその他の場所で学んだ割合が、既存データは3.4%に対して、T大学は25%であった。

「地震に備えた家具の配置」の項目を比較すると、その他で学んだ割合が、既存データ12.4%、T大学は45.8%であった。また、小・中・高等学校で学んだ割合が、既存データが54.5%に対して、T大学では37.5%と低い。T大学生は、家庭科教育や家庭内学習で学んで

いる割合が低い。災害が多数発生している今日、防災教育の不足が考えられる。

## 5. 総括

家庭科教育で衣・食・住生活の技と知識を学んだ割合が60%以上の項目は、既存データで13項目（衣：8項目、食：3項目、住：2項目）、T大学では14項目（衣：8項目、食：3項目、住：3項目）あったものの、各領域での学びに偏りがあることが考えられた。特にT大学は、住生活領域では「地震に備えた家具の配置」の項目で、家庭科教育や家庭内学習の不足がみられた。

また、家庭内学習が50%以上の項目は、既存データでは4項目、T大学3項目と家庭内での生活知識の継承は低い。衣生活領域では、家庭内での技と知識の継承がみられず、学校教育の重要性が示された。住生活領域では、「近隣の接し方」の項目で最も高値となったが、家族関係が多様化・複雑化している昨今の状況を鑑みると家庭内学習の減少化が懸念される。さらに、家庭科教育担当教員を対象に行なった「指導分野の得手不得手に関する調査」<sup>3)</sup>において、どちらかと言うと自信を持って教えるににくい内容として「家族」「住生活」があげられており、学校においても不足する傾向にある。しかし、児童生徒のこれまでの生活や暮らし方に違いがあるからこそ学校の役割は大きく、人との関わり方や生活文化の継承などの理解が深まるよう教材の工夫がより求められる。

地域差では、食生活と住生活で特徴がみられた。T大学生は、食生活領域では、「茶碗蒸しの作り方」の項目で生活文化の継承が期待される。一方、住生活領域では、防災教育の学習不足が課題としてあげられ、他教科との横断的学習や家庭での伝承や啓蒙も重要である。

衣食住に関する生活技術の学習機会について、小・中・高等学校を中心に検討してきた

が、就学前の子どもに目を向けることも大切である。「幼稚園教育要領」<sup>4)</sup>、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」<sup>5)</sup>、「保育所保育指針」<sup>6)</sup>では幼児教育および乳幼児の保育の内容として、衣生活関連では身の回りの清潔おむつ交換や衣服の着脱を通じた清潔になることの心地よさ、食生活関連では望ましい食習慣の形成のための食育の推進、住生活関連では生活の中の様々な音、遊具や用具の整頓、災害時などの行動の仕方、地域の人々など自分の生活に関係の深い人とのふれあいなどを掲げている。このように、生活技術に関わる学習は0歳の乳児からスタートしているとも言える。このことから生活技術の習得と定着は家庭や家庭科での学習に加え、乳幼児期を過ごす幼稚園、子ども園、保育所も重要な役割を担っている。小学校教育との接続にあたっては生活科を中心に円滑に移行しているが、生活科は低学年、家庭科は高学年での学習となり、3・4年生の2年間が空白となっている。平成29年の学習指導要領の改訂で、家庭科は小・中・高等学校の学習内容を系統化したが、乳幼児保育ならびに幼児教育から小学校の生活科・家庭科、中・高等学校へと切れ間なく接続することで、より生活技術が定着し、活用度が向上するのではないかと考える。

## 6. 引用文献・参考文献

- 1) 葛西美樹, 工藤寧子: 生活技術の定着と家庭科教育の課題. 東北女子大学紀要, 58, 81-84, 2020
- 2) 日本学術会議健康・生活科学委員会家政学分会, 家庭科及び家庭科教員養成に関する調査 ―これからの暮らしに家政学が果たすべき役割を考えるために―, 2014
- 3) 前掲: 日本学術会議健康・生活科学委員会家政学分会, 家庭科及び家庭科教員

養成に関する調査. 4.家庭科教育の現状調査, 16-21

- 4) 文部科学省, 幼稚園教育要領解説, フレーベル館, 2018
- 5) 内閣府・文部科学省・厚生労働, 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説, フレーベル館, 2018
- 6) 厚生労働省編, 保育所保育指針解説, フレーベル館, 2018
- 7) 文部科学省, 教育課程部会 家庭、技術・家庭ワーキンググループにおける審議の取りまとめ,  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/065/sonota/\\_icsFiles/afeldfile/2016/09/12/1377053\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/065/sonota/_icsFiles/afeldfile/2016/09/12/1377053_01.pdf)  
(2020.2.10)
- 8) 文部科学省, 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 家庭編, 2018
- 9) 文部科学省, 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 技術・家庭編, 2018
- 10) 文部科学省, 高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 家庭編, 2019
- 11) 文部科学省, 小学校学習指導要領解説 家庭編(平成20年), 2008
- 12) 文部科学省, 中学校学習指導要領解説 技術・家庭編(平成20年), 2008